



寄稿（旧・現教員）



旧・現 教 員

西 村 俊 夫	東京工業大学名誉教授
渡 邊 隆	東京工業大学名誉教授
菅 原 操	(社)海外鉄道技術協力協会 最高技術顧問
日 野 幹 雄	中央大学教授 東京工業大学名誉教授
伯 野 元 彦	攻玉社工科短期大学学長
椎 貝 博 美	日本河川協会会長 筑波大学名誉教授
長 滝 重 義	愛知工業大学教授 東京工業大学名誉教授
吉 田 裕	関東学院大学教授 東京工業大学名誉教授
木 村 孟	大学評価・学位授与機構長 東京工業大学名誉教授
四 俵 正 俊	愛知工業大学・工学部・都市環境学科・土木工学専攻教授
森 地 茂	政策研究大学院大学教授, 東京工業大学名誉教授
岡 本 享 久	太平洋セメント・建材カンパニー・事業推進部長
野 村 卓 史	日本大学教授
松 川 圭 輔	土木工学専攻連携助教授 千代田化工建設勤務
佐々木 栄 一	横浜国立大学助教授

学科設立の頃の思い出

東京工業大学名誉教授

西村 俊夫



この度、土木工学科設立40周年を迎えることになったとのお知らせに接し、よろこばしくも月日の経過の早いことを今更ながら感じている次第です。

私は昭和41年度から55年度までの15年間勤務しましたが、折々の出来事を思い出してみると、いろいろな事がかなり鮮明に印象深く頭の中を駆けめぐり、懐かしく思うことが度々あります。

私はもともととは過ぐる大戦中大学を卒業、当時の鉄道省（国鉄の前身）に奉職、鋼橋の設計・調査部門に配属されました。その後時代は敗戦、米軍の進駐、戦後復興、高度成長期の到来などと激変、国鉄の組織も時代の要請にこたえ変遷を重ねてきましたが、かつて私が配属された部門は名称こそ変われ実質的には人的にも仕事面でも変わりなく、私が昭和41年、45歳で東工大に変わるまで紙と鉛筆・スケール・小ハンマー等を手にする仕事为主体で、専門分野はともかく、それ以外の業務に対する経験など殆ど持たないままの転進でした。加えて私は小学生の頃から人一倍恥ずかしがりやで、人前で話す事などはもっとも不得手としていたのに、今回、学生の前で話をする仕事につく様になろうとは思ってもみなかった訳ですが、兎に角、全力で取り組むしかないという覚悟を決めて着任しました。

当時大学では緑ヶ丘地区に土木・建築棟と実験棟を建設中でした。自身の研究テーマとしては国鉄在職中、痛感していた「老朽鋼橋の疲労強度の解明」としており、実験室にそれに関連する研究設備を整えるのが最初の課題でした。しかし大学の施設課の方からX線装置を囲うコンクリート壁の厚さや、自動溶接機を稼働させる為の必要電力設備などの問い合わせがあり返答に窮した事が思い出されます。

昭和40年代、時代の要請にこたえ、土木工学科を持たない大学ではこの学科の設置機運が高まり、東工大でも建築学科を中心に土木工学科の設立準備が進められ、いろいろな面で大変お世話戴いたと伺っております。また学科設立後は学科育成の為に大変好意的に御協力を戴き、その一環として当時、教官研究費の他に工学部の系ごとに特別設備費の配分がありましたが、建築・土木両科が属する建設系に配布された設備費は私が初めて提出した大型構造物疲労試験機の設置に充当することに決めて戴きました。

この試験機は島津製作所製の当時としては最新型の電

気油圧（サーボ）式、容量50KNのものでした。昭和44年度末に実験棟内に設置工事が終わり、運転を開始した途端に私が肝をつぶしたのは大型モーターを使用した油圧発生装置の運転騒音の大きなことでした。疲労試験の性格上、試験時間は長く、また夜間にも使用されるので周辺環境に及ぼす影響は大きく、果せるかな、早速実験棟に隣接する小学校からの苦情が大学当局に寄せられ、また実験棟内の他の部門の方の実験にも支障が出る様になりました。責任者としての私も困惑の極みでその処置に窮したわけですが、誠に幸いなことに建築学科で騒音環境の研究に取り組んでおられた松井先生のお考えで、油圧装置を煉瓦で完全に囲うことになり、これが見事に成功して少しは騒音が漏れるものの、周辺にさしたる支障はなく、苦情も解消されて私はほっと胸をなで下ろした次第でした。これが着任当時の最大の苦い思い出となりました。

この試験機は以後時々故障を起こし、修理の為乏しい研究費が注ぎ込まれましたが、一方幾多有用な疲れ実験にも寄与し、学位論文を始め修論、卒論の作成等に大きな力を発揮してくれました。

私は現在84歳です。さすがにここ1、2年急速に進んできた老衰現象が身にしみていますが、60歳で東工大を定年後、群馬大で5年間、あと足利工大で6年間を過ごし72歳で教壇を去りました。私が東工大在職中卒研などで顔をあわせていた諸兄の年賀状などを拝見すると、特に年次の早い方に多いのですが、民間に移った、或いは関係会社へ変わったなどかかれています。近年の長寿化にともないまだまだ充分活躍できる年齢です。健康には特に留意して50周年行事も元気に迎えて戴きたいと願っております。



構造第二研究室一同（昭和53年3月27日卒業式の日）

土木工学科設立当時の思い出など



東京工業大学名誉教授

渡邊 隆

昭和37年頃であったと記憶しているが、工大の建築学科の藤岡先生はじめ数人の先生方が東大の土木工学科に來られて、工大に土木の学科新設をしたいので協力をお願いしたいとの申し入れがあった。当時の日本は建設ブームで、首都高速やオリンピック関連街路或いは東名・名神高速、新幹線等盛んに建設が行なわれていた。藤岡先生のお話では工大に土木を造る話はこれで3度目で、最初は大学に昇格した時、2度目は新制切替えの時、今回やっと学内的にも問題が無くなったのでよろしくとのことであった。東大では積極的に工大に協力することが決まり、筆者は工大に移って設立に協力することとなった。それから新設のため国会関係者への説明、自民党文教部会への挨拶、或いは関係官庁への陳情等が盛んに行なわれたが、筆者も最も若輩の一員としてそれらの活動にも加わることとなった。お聞き及びの方も多いことと思うが、当時の田中角栄大蔵大臣に「なに、旧制大学で土木が無い、よっしゃ」と予算が認められて喜んだことを覚えている。

昭和39年度に工大土木の新設が認められ、土木専門の教官は40年度から着任することとなった。筆者は当初40年度から移る予定であったが、山口先生が早く退職届けを出してしまったとのことで、吉川先生とお二人の教授で出発して頂いたのである。間もなく東大では学園紛争が始まり、有名な安田講堂事件等がおきて、筆者はうまいときに移ったなどと言われたが、工大でもその後紛争が始まり、封鎖だ、団交だと落ち着かぬ時期もあった。



昭和57年頃の渡辺・森地研究室

紛争当時には新設の土木はあまり他の学科の方々と付き合いが無かったし、東大が紛争の象徴のような感じでもあるので、東大出身の教官が多かった土木は、東大紛争で持て余された人が移って来たのではないかと疑われる恐れもあった。新設学科故にあらぬ疑いを払拭するには大変努力が必要であったと記憶している。筆者も学長補佐の時、紛争の発端となった土建棟正面の向丘寮のとり壊し作戦を計画し、現場責任者として夜明け前から現場に立ち続けるという今では考えられぬような経験もした。

その後土木からは学長始め、学部長、大学院の研究科長など大学の管理運営にも重要な役割で活躍する人々も出て、他の学科にひけをとらぬ位置を占めており、設立当初のいろいろな苦勞も報われたのではないかと大変喜んでいる。土木、建築は同じ建設分野でも、実際にはあまり協力的には活動していないことも多いようで、例えば構造材料の許容応力の符号迄違ったりしている。しかし、工大では設立の段階から建築と土木が協力して学科新設を進め、この点の問題が殆ど無い珍しい例の一つだと思っている。

土木は6講座で学生定員40人で設置されたが、その内2講座が水関係という、他の大学と異なった構成で設立されたため、教宮の構成にも窮屈さがあった。しかも世の中で認められるためには、土木の特殊性から卒業生の官庁関係への進出が必要と考えられた。このため、計画分野の必要性が大きいものと考えられ、我々の道路関係講座を舗装から計画に変えたので、多少淋しい思いもしたが、止むを得なかったものと考えている。

建設分野は最近の景気回復からはとり残された日の当たらぬ分野になっているようであるが、こんな時こそ将来を見据えて新しい分野を開拓し、存在価値を高める必要があるものと思っている。また、我々が地表で生活する限り、土木技術は安全で快適な生活のために欠かせないことを人々が容易に理解できるような説明も大切であろう。更に、最近異常気象による災害、或いは地震、津波等土木技術の必要性を痛感させられる事件が多い。これらの事件を技術的な面、或いは世の中の対応の面等から解決策を考え、土木技術の益々の発展と工大土木の存在をアピールして頂くことを期待して拙文を終えたい。

学生との交流の思い出

(社)海外鉄道技術協力協会 最高技術顧問

菅原 操



昭和45年（1970年）4月当時の国鉄で、第三次長期計画の作業を終わって、東工大の教授としてお世話になることになりました。

丁度東工大に社会工学科が開設された時期で、私は社会工学科で交通資源計画講座をもち、土木工学科を兼務する事になりました。社会工学科の役割は、集まった研究者により、いろいろな考え方がありました。私は社会工学は、経済学、社会学、土木工学、建築学などに立脚するが、これらを基礎学問として、社会基盤の整備を行うための学際的な学問として位置付けておりました。東大の八十島教授や、一足さきに東工大社会工学科に赴任して居られた鈴木忠義教授に熱心に要請されて、この仕事につきました。

教授の仕事は、もとより研究と学生の指導にあります。が、当時國をあげて国土開発や、都市基盤整備計画の最中であり、新全総計画、運輸審議会はじめ多くの審議会のお手伝いにも時間を割きました。これらを通じて研究項目の中心は、土木計画学であり、土木学会では、土木計画学研究委員会の黎明期でした。私は、昭和49年（1974年）4月には、国鉄に復帰し、山陽新幹線の建設には博多開業の時期まで参加する事になったので、東工大の勤務は、大変忙しい密度の高い4年間でした。当時の修士学生、卒論ゼミの学生諸君は、大学、中央官庁、地方庁、公団、建設業、コンサルタント、商社など、進路は様々でしたが、それぞれ有力な社会人として、活躍して居られるのは無上の喜びです。

研究仲間であった中村英夫さんが大学時代の軟式野球の名手であったこともあり、土木計画のメンバーで野球チームをつくり、ゼミ仲間での試合から始めて、近年は関東10大学の定期戦まで広がったのは、楽しい限りであり、これは土木計画学の研究者が急速に拡大したことの証左であるとも考え、喜んで居ります。

学生との交流の思い出のひとつは、「日本工科系学生使節団（MJET）」の第5回団長を務めたことです。これは、日仏両国の工科系の大学生から使節団を編成し、双方から隔年毎に相手国に送り、専門を問わずそれぞれの國の特徴ある、または新しい産業や施設を訪問するツアーです。両国の工業技術を通じての親睦を發展させることを目的としたもので、日仏工業技術会が支援して下さい、1971年3月に、第5回使節団を日本から送り出す番でした。東工大、農工大など4大学からの約30人の学生を引率して、ほぼ1ヶ月フランス国内をまわり、パリの下水処理場、ワインのカーブ、潮力発電、アエロトラン（空気浮上列車）の試験線（写真-A）、香水製造所などを見学しました。グルノーブルでは、日本の学生がフランスの学生たちと、フリーに交流する時間をとったりして、学生たちのよい経験になったものと思います。当時の学生グループのリーダーは、現在の東工大工学部長の三木千寿さんや、東日本コンクリート（株）社長の小倉迪郎さん達で、当時から、後輩たちをよく纏めて居られました。



写真-A 日本工科系学生使節団、フランスアエロトラン試乗（1971.3）

創設期の土木教室

中央大学教授 東京工業大学名誉教授

日野 幹雄

1960年（昭和35年）春、岸信介首相が辞任し、池田勇人（ハヤト）が首相となった。池田首相は「所得倍増」のキャッチフレーズで所得倍増の成長経済政策を採り始めた。日本版ケインズ政策の開始であり、同時に池田首相は「寛容と忍耐」を基本姿勢とした。（もう、イデオロギーの政治は止めしようということであったのだろう。また、最近読んだ塩野七生さんの「ローマ人の物語」でローマ帝国の実質的創建者であるカエサルも共和制ローマの内乱収拾後に「復讐は止め、寛容の政策」を採ったと知った。）これ以後、我が国の大学には土木系・建設系の学科の新設が相次いだ。東工大の土木工学科の新設はこうした学科新設ラッシュの最後のものではあった。こうして新設された諸大学の土木工学系の学科の中で、東工大土木は成功した部類に入るだろう。一応それを認めてのことであるが、その理由は種々挙げられるであろう。東工大自体が「蔵前」と呼ばれた時代からの名門校であったことも勿論であるが、ここでは以下の2、3の点について述べてみたい。

（1）吉川・山口両先生の卓抜した手腕・指導力

新設当時の東工大・土木工学科をぐいぐいと引っ張って行かれたのは、頭脳が明晰な点（と年齢がほぼ同じ点）を除くと、性格や印象が全く異なる吉川秀夫、山口柏樹両先生である。私たち当時の若手（助教授、助手）からみると、すごく貫禄があり大家のようにみえたが、両先生とも40歳の前半であった。両先生が土木教室を引っ張って行かれたと書いたが、こんな場合に良くあるように、大号令を掛けたり、訓辞を垂れたりされたことは一度もない。（大号令や訓辞は（短時間的にはともかく）長い間の効果は続かない。）

両先生は、夕刻以後お二人でしばしば（多くは山口教授の室で）相談されていた。山口先生は今亡く、吉川先生は問われても答えられない方であるので、何をどのように話し合われたか知る由もないが、

お二人の先生の教室運用の特徴を一言で言えば、「人事の妙」と「教育そして研究の基本方針（あるいは基本精神）」であったと思う。

われわれは、良く意見を言い合い議論をしたと思う。私は東工大停年後これも新設のある私大の文化系学部

移ったので、その差はよくわかる。このような雰囲気は、一つには教授陣と助教授・助手との関係は、多くの大学の場合と異なり、師と弟子（教え教わる）という上下関係が全くなかったことにもある程度関係するかもしれない。つまり、構成員は一つの大学から直接的に一括して送り込まれたのではなく、いろいろな職場からの集合体であった。

この空気は、東工大の助教授時代の伯野元彦さん（後東大地震研、東洋大、攻玉社大）が冗談めかして「東工大では教授が一言しゃべると、助教授は三言いう」と評したことで解るであろう。といっても、最終的には両先生の判断で決定をした。というよりも、両先生は予め結論をもっておられ、我々にそれを理解させるために議論をさせたのかもしれない。

- ・中瀬先生を港研からお呼びするときの電撃的な決定。
- ・60歳の定年まで数年残しての吉川先生の早稲田大学転出の爆弾的宣言。普段はメモなど用意なされない吉川先生もこの時ばかりは小さな紙にメモされてこられたことを、確認しながら話されていた。

（2）建築学科の協力

大学に新学科が創設されるときには、多くの場合その大学内の関連学科が世話役の主体になるようである。もちろん、その大学以外の協力が必要であるが、足場のない所には新設は難しいのです。さて、こうした場合良く耳にするのはこの世話役学科からの干渉で、酷い時には一講座分のスタッフを押し込まれることもあると聞く。この点、東工大・建築学科の教授達は立派であったと思う。大御所の藤岡通夫（ミチオ）先生をはじめ建築学科からは何らの干渉もお節介もされなかったと思う。この点については助教授であった私には詳しくはわからない。

研究室の関係でも土質関係は極めて密接であったし、比較的接点の少ない水理関係でも風工学では当時多少は進んでいた私の所に大熊さん（現、神奈川工大、前風工学会長）や田村（哲朗）さん（清水建設→東工大、長津田）を紹介したのは建築構造の藤本盛久先生であった。大熊、田村両氏は今では風工学界のリーダーとして活躍されている。いずれにしても、建設科の先生達とは

極めて良い関係にあったことが、東工大土木が良い軌道に乗った大きな一因であるとは言えると思う。

(3) 教育—学生実験の効果・卒修論発表の討議

東工大・土木工学科が新設されたのは、いわゆる学園紛争が吹き荒れる直前のことで、ハンガリー動乱や毛沢東指導の中国の文化大革命の頃であった。この嵐は日本にも学園紛争という形で現れたとも言える。そして東工大土木の教育・研究が独特のものとして確立されていくのがこの余波の中であった。その一端として学生実験と卒・修論の発表会を挙げたいと思う。それまでは、実験器具どころか建物さえなかったのだから、きちんとした学生実験は行えなかった。すべては手探りですすめた時代であった。学生実験の装置や器具は金もなかったしあり合わせのものや手作りであった。一学年40人の学生を10名かそれ以下人数のグループに分け、実験に取り掛かる前に一班ずつ実験の理論的基礎が十分理解されているかについて前試問を行った。単に測定するだけでは駄目で、予習が不十分な班はその日の実験はできなかった。さて、実験が済んでもその日の内にデータ整理・解析・レポート作成、そして最後には(レポートの出来た班から順に)厳しい試問が始まる。これで、本当に「水理学の考え方」いや「考え方」が身に付いたと思う。であるから、教員達の帰宅は夜遅く時には夜零時を過ぎることも屢々あった。このやり方は水理から始めたように思うが、後に教育効果の高いことから他の所でもやり出した。そのため、水理実験のテーマ数を削ることになった。

この学生実験を主導したのは、吉川先生で当時助教授であった椎貝さんは実に適格に学生の実験の間違ひを見抜いた。この最後の一班ずつの試問には吉川先生をはじめすべてのスタッフが参加した。吉川先生には、この試問の目的として学生の教育はもちろんだが、(一応水理学は学んではいるけれども、十分理解が深くはないと思われる)若いスタッフの教育の意図があったと思う。実に巧みなやり方であった。

卒論・修論の指導も、毎週全学生(水理関係の2講座)と全教員(教授、助教授、助手)の参加で行われた。一回には1~2名の実験や解析・理論計算の発表であったが、先生達からは極めて厳しい質問が飛んだ。これは表面的は学生への質問であったが、時には同時にそのテーマに深く関わっている教員への質問。疑点の指摘になっていて、ある意味では巧妙なものであった。あまりの質問の厳しさに、泣き出す学生もいた。私自身は先頭切っ質問することは控え、もっぱら学生の言いたいことを全部聴いてから、言わせてからサポートしようと心掛けていたが、発表途中で次々と質問を浴びせられる学生は大変であったろうと思う。このような形式は今ではそれ

程珍しくはなくなっただけでしょうが、

ここで一言付け加えよう。学生達は大学で習ったことがそのままの形で実社会で使われるわけではない。卒論や修論のテーマを具体例として、どう問題を捉え、考え解決してゆくかを身に付けて欲しいというのが趣旨であった。特殊なテーマが卒論後もそのまま自身の仕事となるわけではないし、また学問自体も日々進み、手段である実験器具や(コンピューターなどの)解析法も凄い勢いで進歩するわけですから。

卒論と修論の発表会は年一度である。しかし、全教員が自分と直接関係のないテーマの発表も聴き、短い質問時間にも他分野の先生達から質問を浴びせかけられることで、土木教室全体の研究レベルの向上になったと思う。中には他分野の先生達からの的はずれの質問もあったでしょうが。

年一度だけのことであるが、先生達は前年あるいはそれ以前の関連テーマの発表や質疑も良く記憶しており、うかうか手抜きはできないものであった。一学年の学生数が少ない(恐らく全国最小の土木工学科)から、こうした全教員出席の卒修論の発表会ができたのでしょ

(4) 楽しかった教室の旅行

創設当時は土木教室のスタッフ数も少なく、また現在に較べて雑用もなく、年一回の教室旅行には皆がよく参加した。今ではスタッフ数も多くなり、何よりも公的雑用が増えてほぼ全員参加の旅行は無理ではないだろうか。

- ・河野二夫(ツギオ)さん(東工大助手→琉球大学教授→宮崎大学,故人)が幹事役での千葉県への旅行。今では考えられない無舗装のガタガタ道をレンタカーで。老成した風格の河野さんは未だ助手であったがレンタカーの運転手に教授と思われていたようだった。
- ・中瀬明男先生が教授として港研から東工大へ移って間もなくの那須への旅行。標高の高い山麓の紅葉と牧場(日本にもこんな所があると感激)、帰りの道端の真っ赤なサルビア。
- ・三木さんが幹事での日光への旅行。この時中国大連からの池さん(彼は文化大革命の経験者)が参加していた。話が弾んでミニバー。ボックスが空になり幹事の三木さんは大弱り。紅葉や溪流の水が綺麗であった。そして寒かった。

今思い返すと、本当に良い時を、一生に一度しかない生を、それを良き先輩、仲間、学生達と東工大で送れたのは幸いです。

懐かしい東京工業大学土木工学科の3年間

攻玉社工科短期大学学長 東京大学名誉教授

伯野 元彦



私は、昭和41年7月から昭和44年6月までの約3年間、構造工学講座の助教授として、大岡山に勤務させていただいた。それまでは、東大土木を卒業、東大生産技術研究所で助手、講師として地震工学を研究していた。その間、1年ニューヨークのコロンビア大学工学部土木・工業力学教室でポストドクとして、確率の構造力学への応用を研究した。そして日本に帰って1年足らずの赴任だった。当時東工大土木はできてからまだ1年一寸で1期生が2年生であった。どんな団体でも、そうであろうが東工大土木の創業時の熱気は特に教官に著しく私もその空気に押されるように「頑張らなくては」と気持ちを引き締めたことを昨日のように覚えている。私が着任当時、教官としては教授が、吉川秀夫（河川工学）、山口柏樹（土質力学）、渡辺 隆（交通工学）の3先生、助教授は、椎貝博美（水理学）、長滝重義（コンクリート工学）先生と私、伯野元彦の3人、助手で、木村 孟（土質力学）、福岡捷二（河川工学）四俣正俊（構造工学）先生の3人であった。そして土木工学科の教室とか教官研究室などは、ちゃんとしたものは無く、他学科の教室を間借りして使っていた。教官ならびに職員の部屋は、当時、原子炉工学研究所の1階に大部屋があり、全教官、職員がそこでワイワイガヤガヤとした雰囲気でも今でも良い思い出として残っている。机の配置は、高校の職員室を思い出して頂けばよい。私は山口教授の下にいた。私が着任した当時は教官の数も少なく、教授、助教授、助手を揃えている講座は一つも無かった。であるから、講座制で教授、助教授、助手の一種の身分制に縛られること無く、この大部屋は私ども若い教官にとっては自由を満喫できたとも言える。逆に教授の先生方にとってはご自分の手助けをしてくれる人が少なく御不満だったかも知れない。私にとってもう一つ不安だったのは、学生に講義をするのが本業としては初めてだったことである。前任の東大生産技術研究所は、研究所であるから本業は教育ではない。勿論、東大の大学院では、講義をしていたが、学部ではまだ講義をしたことが無かった。赴任した年度はたいした講義もしないで終わってしまったように思うが、次の年度からは、構造力学、地震工学などの講義をした。教官共通の認識だったと思うが、東工大土木を日

本のトップクラスにするという目的があった。そのためにはどうするか。「東大、京大に追いつき、追い越せ」である。学校の格差がすぐわかるのは、土木の分野では国家公務員上級職試験に何人合格したかである。私もその10年足らず前に、同じ公務員試験を受けていたので、私の受け持つ構造力学が試験問題の中でも主要な科目の一つであることを十分認識していたので、通常の講義だけでなく、試験のような短時間で解くための便法みたいなものも教えた覚えがある。そして色々な教科について、特に若い教官を中心にして、模試のようなものも行った。その結果は詳しい数字は忘れてしまったが、一期生から大変に良い成績（遠い昔のことなのであやふやだが、東大をやっつけたのではなかったか）に皆で大喜びした覚えがある。私の着任1年後までには、緑ヶ丘の6階建ての土木・建築棟ができ、そこへの引越し、私の上司の西村俊夫教授（構造工学）の着任、さらに鈴木忠義教授（計画学）、中瀬明夫教授（土質工学）、日野幹夫教授（水理学）らが加わって、土木工学科も確かなものに育ちあがっていった。こうして、順調な仕上がりを見せていたが、ここにとんでもないことが起こった。それは当時、東大附属病院に端を発した大学紛争が大変な広がりを見せ東工大にまで及んできたのである。そして、第1回の卒業生を無事立派に育て上げられたと胸を張って送り出した途端に、落ち着いて講義もできないような状況となり、全学的に対策会議が頻繁に開かれるようになった。この紛争の学生側の指導部に民主党の菅元代表が応用物理学科の学生として居たとは後で知ったことである。私は、講義もできず研究室にも入れない状態が2~3ヶ月も続くと厭になり、そこに東大地震研究所から、ここは東大紛争とは関係なく落ち着いて研究できるぞ、来ないかと誘いがあり、それに乗って3年間の東工大生活に別れを告げたのである。

この3年間を省みると、学科創設期、研究所から教育への転換、助教授となって一人前になったこと、紛争、とこんなに密度の濃い経験は私の人生に無かったことで、いまだにその当時の学生さんとは付き合い合っているし、東工大土木の名前を何かで見たり聞いたりすると懐かしく思い出されるのである。

東京工業大学土木工学科創設の思い出

日本河川協会会長 筑波大学名誉教授

椎貝 博美



東工大土木工学科の創設については、東大と京大の間に一種の確執があった。現在ではこの二つの大学は仲がよいが、私が大学院博士課程中退で東大助手に採用されたとき、二つの大学間の競争意識が高かったので文部省は閉口していた。

結局東大が地元の利を占めて世話校に指名された。そのとき東大の教授、助教授の先生方は東工大に移籍するのを躊躇されたので、世話人の本間仁教授（当時）と最上武雄教授（故人）は非常に困惑されたようである。

ある日私は指導教官の本間教授によばれ、「東工大に行って貰えますか」と聞かれた。私が、もちろんです、と答えると、それでは世話人の最上教授のところに行け、というので早速最上教授の部屋にお邪魔した。

「私が東工大にまいります」と申し上げると、先生は、有難う、と私の手を固く握られた。これにはちょっと困惑した。

東工大に挨拶に行くと、世話人である建築の藤本教授は大変喜んでくれた。その後京大の石原藤次郎教授（故人）にお会いしたので、この件を申し上げますと、石原先生も喜んでくれた。あとで聞くと本間、石原の両先生はこの件で心を痛めておられ、まず本間、石原間で大学を入れ替わろうではないか、という計画を立てておられたのであった。

私は助教授で東工大に採用されることになり、教授は中央大から山口柏樹教授（故人）がこられることになった。

講座を形成するために助手が必要、というので5分ほ

ど面接して長谷川佐代子さん（現姓宇梶）を助手に採用した。

第一回生の授業が始まると、建築構造は建築学科の藤本教授、土質力学は山口教授が担当され、あとは教養科目を除いて私が授業をした。ある日沢本正樹さん（現東北大学教授）に、授業中「先生、ほかに先生はいないんですか？」と質問を受けた。

山口教授に相談すると、「ああ、それなら次の授業は俺の上着を着ろ」というのでそのようにしたら学生は喜んだ。

この結果については東大だけではなく、京大の石原教授（故人）も喜んでくれて、学会の幹事にされ、しばらく石原先生のカバン持ちもやった。これがきっかけで後に京大の若い先生方と懇意になり、大規模な東南アジアの調査にまで発展した。これについては現在山梨大教授の竹内邦良さんが大きな貢献をした。

次第に吉川秀夫、日野幹雄、木村孟、長滝重義等の先生方が着任され、土木工学科は発展した。特に木村さんはその後東工大大学長も勤められた。また私が山梨大学に赴任したときは、砂田健吾さんに大変お世話になった。

筑波大学の武若聡さんとは霞ヶ浦問題でよく出会うし、技官だった佐藤郁太郎さんとも国土交通省の会合でよく出会う。建設技研トップの大島一哉さんにいたっては、ときどき私の勤めている日本河川協会を訪ねてくれる。

私は結果として7つの大学に正規に勤務したが、その中でも東工大の思い出は尽きることがない。



中央左Prof. A.T. Ippen (MIT), 中央右Dr. Anat, 右筆者
1969年 AIT赴任時バンコクドゥシタニホテルにて



左筆者, 中央元AIT学長Prof. M.E. Bender, 右木村先生
1976. 7 AITにて

土木工学科設立40周年によせて

愛知工業大学教授 東京工業大学名誉教授

長瀧 重義

東京工業大学土木工学科がこの度40周年を迎えられること、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。私自身は昭和40年7月16日に助教授として赴任し、昭和55年7月1日に教授昇任そして平成9年3月まで在職しましたので、計31年半勤めたこととなります。60歳の停年で東工大にお別れしたわけですから、それまでの年数の半分以上を東工大で過ごしたことになります。卒業生でないものには稀有の年数でありました。私の赴任時は土木工学科に進学した初めての2年生を迎えても建物がなく借室住まいでしたが、昭和42年暮れに新築の緑ヶ丘1、2号館に引越しが出来、43年3月に第1期生を土木工学科の建物から送り出すことができたのは幸せでした。その後第30期生を送り出すまで在職させていただいてから新潟大学へ転任し（実際は1年前に配置換えで東工大には併任で在職）、また現在は愛知工業大学に勤務させていただいていますが、いずれの職場においても東工大時代の同僚、東工大の卒業生あるいは東工大で学位を取得された方々

に囲まれて気持ちよく生活させていただいています。また、研究活動や学協会の委員会活動においても卒業生の支援がなければ、とても今のような実績を上げることは不可能で、東工大の土木工学科に在職できたことの幸せを毎日のように痛感しております。大学も法人化されたり、子供の少子化や理工系離れなど大変な時代を迎えておりますが、東工大土木工学科はこの難局に臆することなく、これからも独自の道を切り開かれて成果を挙げられることを祈念しております。

お送りします写真はコンクリート研究室（通称長瀧研）の10周年の記念写真（1975. 11. 1）で、在職した職員、秘書、研究員および卒業生が写っています。同様の会は20周年、30周年にも開催していただきましたが人数が多くて写真が2枚になること、なるべく古い写真をとの依頼から敢えて10年にしました。皆さん方が若いときの写真ですが今は社会の第一線で活躍中です。広島大、東工大の現職の教授も写っています。



コンクリート研究室10周年記念写真（1975. 11. 1）

設立40周年に当って想う事

関東学院大学教授 東京工業大学名誉教授

吉田 裕



設立40周年と聞いて、在籍した30年近くの年月の諸々を思い、今更ながら時の立つ早さに感慨一入です。私が助教授として着任した昭和46年は、大学紛争の後遺症が色濃く残っている時代でした。だからこそと言うべきか、設立間もない東工大土木教室には、教育や研究に掛ける熱情というか、希望と活気に溢れておりました。山口先生と吉川先生が連携して、血気盛んな若手のやる気を上手に引き出していた、というのが実状だったかもしれません。

技術の進展に伴って、教えるべきと考えられる教育内容は多様化しますし、進学や就職時に見られる学生の意識や勉強意欲などは世の中の風潮の影響を敏感に受けまます。カリキュラムの限られた時間数の中で、どの学科目をどのように割り当てるか、学生の自覚をどのように促すかなど、よく議論されたことを思い出します。競うように夜遅くまで続けられていた学生実験の試問のことが強く印象に残っています。また何故か、公務員試験のための面倒をみておられた、院生時代の石川先生の真摯な取り組みと夜中に聞こえてきた素適な歌声が思い出されます。

その後の土木界を取り巻く環境は、高度成長に支えられて順調に推移した時代、石油ショックを経て構造不況と悲観に覆われた時代、バブル経済に踊った時代、バブルが弾けて続く苦難に満ちた時代と、山あり谷ありでした。3Kなどが言われて、学会などで改名が盛んに議論されたりしました。現在では、議論の段階を超えて軒並み実際に改名されておりますが、中身に自信をもって土木の名称を維持しているのは見識だと思います。頂点に立つ東工大ですから、名称は大切にしてください。

学生の就職は総じて順調でしたが、全ての学生の希望が完全に満たされるという訳には行きません。毎年、研究室全員の進路が決着するまでの間は、心が休まらなかったことを思い出しますが、卒業生の多くが一流の職場で重責を担って活躍しておられる姿に接することができる幸せは、東工大に籍を置いていたからこそと、深く感謝しています。また、研究の課題を有限要素法による非線形解析法の高度化や効率化などに置いていたから、卒論や修論などは、すんなり進展することは稀で、コンピュータと格闘する日々の連続だったのですが、優秀な学生と苦勞を共にし、喜びを分かち合った日々は、掛替えの無い、幸せに満ちたものでした。平成7年に出版



構友会（昭和55年秋）

された東工大史記の編集に際して、多くの卒業生から頂いた励ましのメッセージは、有難く、心の支えになりました。

40周年記念誌への寄稿文を依頼されて、20周年記念事業の際に世話人の一人として役割を担ったことを思い出します。その際に寄稿文を頂いた諸先生を越す年齢にありますので、相応の文をと思ったのですが、今なお、現在在籍する大学で、昨年4月に新設された学科の新入の一年生を対象とする少人数教育などで悪戦苦闘している身であれば、大所高所からの言は憚られます。そんなこんなで、東工大時代の思い出の一端を綴らせて頂きました。お許し下さい。

設立時から20周年の間に、第一世代を導いてこられた

先生方が転出されて、学科の雰囲気が大きく変わったように思います。今また、20周年から40周年の間には、かつて若手であった方々の殆どが転出して顔ぶれが一変しましたので、学科の様相は相当に変わっていることと思います。

人の入れ代りは自然の摂理ですが、初志を大切に、よい伝統は守り続けて下さい。この先、50周年、100周年に向けて、東工大土木工学科の大なる繁栄を心から願っています。

写真をとということですので、西村先生を囲む会として、昭和55年秋に開いた構友会の際の写真を添えさせていただきます。前列中央に、西村先生を挟んで伯野先生と私です。多くの若き日の姿に、改めて歳月の流れを感じます。



その昔助手会ありき

大学評価・学位授与機構長 東京工業大学名誉教授

木村 孟

さまざまな歴史的経緯を経て、東京工業大学に土木工学科が新設されたのが、昭和39年である。翌40年には、第一回生が進学してきたが、その時在籍していたティーチングスタッフは、故山口柏樹先生ただ一人であった。第一回生には、澤本正樹、寺師昌明、成田国朝、林正明君といった、今まさに社会で中心的な活躍をしている面々がいたが、自分達が進学してみたら、先生が一人しかいないということで、こんな馬鹿なことがあるかと、山口先生のところへ抗議に押しかけたという話を聞いた。

筆者が助手として赴任したのは、40年の6月であり、その後10ヶ月ほど助手一人体制が続いたが、翌41年の4月に、四俵正俊、建部英博、福岡捷二、米山紘一の四君が赴任し、急に賑やかになった。その年に、さらに、河野二男、丸山嘉高のお二人が加わり、総勢7名の大世帯となったためか、たれ言うともなく、助手会を作ろうという話になり、古い順ということで、筆者が会長になった。皆、年齢がほぼ同じであったため、非常に仲の良い助手会となったが、さらに親睦を図ろうということで、会計担当を置いて、いくばくかの会費を徴収することにした。会計担当を申し出たのは、現中央大学教授の福岡君である。本人の申し出であるため、全員一も二もなく賛成したが、その後、福岡君は大変な会計担当であることが分かった。期末には、収支の辻褃は完全に合ってい

て問題ないのであるが、中間期には会費が殆どないという状況が何度かあることを誰かが見つけたのである。そのことについて問いただすと、「いやあ、飲みに行くのにお金がないので、ちょっと借りただけです。すぐ返していますから」とあっけらかんとしている。皆、ちょっとびっくりしたが、きちんと返済されているので問題なからうと、一件落着。福岡君はその後も会計担当の特権を大いに利用していたようであるが、収支に全く問題がなかったことは、本人の名誉のために書き添えておく。

当時の助手会のメンバーは全員個性豊かな人物であったが、一際異彩を放っていたのが吉川先生のもとへ建設省の土木研究所から来られた河野二男さんであった。朴訥な九州男児の河野さんは、普段は大人しかったが、こと自分の専門の話になると、物凄く頑固で、吉川先生でも、山口先生との議論でも絶対に引かないのである。専門は違うが、山口先生とはしょっちゅう丁々発止とやっておられた。そばで議論を聞いていて、明らかに河野さんが間違っている場合でも、それを認めないのである。そんな議論の後、河野さん、必ず筆者のところへ来て、「山口先生、なんもわかったらんごたるですね」と自説をひとくさり、相手をするのが大変であった。

当時の東工大の土木工学科は、助手会だけではなく、教授の先生方を含めた組織としても非常に良くまとまっていた。土木学会の年次講演会での出張の際には、全員

が一つの大部屋でごろ寝をしたこともある。酒も良く飲んだ。北海道の学会の折であったと思うが、河野さん、日頃の鬱憤を一気に爆発させてしまった。かなり酔っ払った勢いで、山口先生を捕まえて、「こら、山口柏樹。お前は、何もわかっとらん」と始まったのである。回りはびっくりしたが、当の山口先生もいつもの調子で相当きこしめしている。河野さんからひどいことを言われても、「いやあ、参ったねこりゃあ」と、にこにこして得意の額叩きを繰り返して、ちゅっと音を立てて出てくる徳利を次々と空にしておられた。次の日のお二人の状態は、相当なもので、列車で東京に帰り着くまで何も喉に通らなかつたようである。

河野さん、その後、宮崎大学の教授として活躍されたが、定年直後に敗血症のため鬼籍に入られた。そのことを知ったのは、暫く後であったので、奥様にお悔やみを申し上げる機会を逸してしまった。今もって慙愧に耐えない。

個性の強い助手会の面々の中で、目立たないが存在感のあったのが、コンクリートの助手の米山絃一君である。新潟の出身で、酒が強く、とにかく粘り強い人であった。コンクリート研究室の研究は、実験が主体であったので、米山君は、殆どの時間を実験室で過ごしていたが、教授、助教授、助手が雑居していた唯一の研究室へ時々顔を出しては、にこっと笑って一言二言交わして、また実験室へ戻っていく。どういう訳か、今でも、米山君のあの笑顔をはっきり覚えている。助手会の面々、皆、血気盛んな年頃である。時には激しい議論になる。そんな時、

米山君は、大体黙っているが、時々発言する。その発言が重いのである。最も血気盛んでしょっちゅう口角泡を飛ばしていた福岡君も、米山君には一目を置いていた。米山君、その後新潟大学で教授になったが、病を得て、婦らぬ人になってしまった。同じ、新潟大学の大川秀雄君から、時々米山君の病状について報告を受けていたが、一時はかなり希望の持てる状態であると聞いていただけに、訃報に接したときは本当に驚いた。

東京工業大学の土木工学科もその後大発展を遂げた。関連学科、関連専攻まで含めると、スタッフの数も学生の数も、初期の時代の何倍かに膨れ上がっている。今でも、助手会というのがあるのかどうか定かではないが、少なくとも初期の助手会が、その発展の礎を築いたことには間違いがない。初期のメンバーの内、鬼籍に入られた、河野二男さん、米山絃一君もそのことに、全く異論はないであろう。

助手という名前が良くないと言う議論が随分前からあり、この度の中央教育審議会の答申により、従来の研究助手を、助教という名称に変えることが正式に決まった。筆者は、助手の時代、助手という名称に全く抵抗感を感じなかった。ここに書いた当時の仲間も、恐らく同じ気持ちであったように思う。その後も含めて、土木工学科の助手会メンバーは、殆どが大学の教授または助教授になって大活躍をしている。助手が助教に変わって、これまでより、研究、教育がスムーズに行われるようになれば大変結構であるが、筆者は半信半疑である。



写っているのは、左から伯野先生、四俵、(一人おいて)木村、(二人おいて)福岡、森地、(二人おいて)米山です。女性は先生方の秘書です。その他の男子は実験を手伝う技官の方々です。ここで呼び捨てにしているのは、東工大の助手だった面々です。仲良く遊びに行った時の写真であることは間違いありませんが、この旅行を誰が主催して、何時、何処に、何をしに行ったのか、覚えている人が見つかりません。この写真の周りの写真から「助手会が釣りに行った」という有力な説があります。

貧から富へ

愛知工業大学・工学部・都市環境学科・土木工学専攻教授

四俵 正俊

各著者が分担する部分を割り当てられていないこの種の文集では、どういう読者を想定して何を書けばいいのが難しいものがある。が、悩んでいても仕方がない。(読んでくれるかどうかはともかく)若い人を対象にして、東京工業大学に土木工学科が出来た頃の時代背景について少し書いてみよう。

私は昭和41年(1966年)に学部を卒業すると同時に、出来たばかりの東京工業大学・土木工学科に就職し、以後現在の職場(愛知工業大学)に移るまでの8年間、助手として勤務した。

1966年当時、自家用自動車を持っている人は珍しく、土木の教員には一人もいなかったかと思う。「ビジネスガール(当時働く独身の女性をこう呼んでいた!)でも買える車と銘打ってフォードがムスタング(今ではマスタング!)というスポーツカーを発売した」というニュースを聞いて、アメリカの裕福さに信じられない思いを持った。毎年30%ずつベースアップがあり、我々の生活もだんだん向上して行く中、土木の助手5人が金を出し合って縦目のセドリック(もちろん中古車)を購入した。その中で私と建部英博氏のみが免許を持っており、他のメンバーに運転を教えて府中で免許を取らせた。学内の道路で運転練習したことも今となっては信じがたい。それからあれよあれよという間に、日本の車は増えて行き、

ご存じの通りになった。電話やテレビも同じようなものである。

助手の福岡捷二氏が、フルブライト(たぶん)の留学生として渡米した。他の助手が皆で羽田空港まで見送りに行った。送迎デッキで手を振ったら、タキシングする旅客機の円い窓からハンカチが振られていたのを憶えている。当時、1ドルは360円。持ち出せる外貨には制限があった(500ドルまで?)。普通の人には、自分が海外旅行をすることができるなど夢にも思わなかった。

象徴的に車と海外旅行を取り上げたが、要するに、東工大・土木の誕生に立ち合った世代は、猛烈な勢いで豊かになって行く日本のただ中にいたのである。東工大・土木だけでなく、多くの大学、あるいは土木工学科が生まれた。現在の中国と同じように、当時の日本は発展の勢いを持っていた。東工大・土木の教員・学生も「時代の勢い」を持っていたと思う。

これから日本を背負っていく世代は、豊かさの中に安定した日本に生まれ育ってきたから、時代の勢いは持っていないかも知れない。しかし、私が知る限りの東工大・土木には設立当時に劣らない活力が満ちているように見える。世界に羽ばたき、地球を救う東工大・土木を期待したい。

土木工学科における計画系研究室

政策研究大学院大学教授、東京工業大学名誉教授

森地 茂

土木工学科設立時の講座名には、6講座中に交通工学講座、都市工学講座の2講座が設置されている。交通工学講座は、教授が渡辺隆先生、助教授が鈴木忠義先生で、都市工学講座の初代教授は、八十島義之助東大教授(当時)が併任しておられた。筆者は、1967年2月1日付けで、鈴木先生の助手として採用された。その日は、土木

学会に新たに設置が認められた土木計画学委員会の第1回土木計画学シンポジウム(八重洲の株式会社大和証券講堂にて開催)の初日であった。当初、計画系の学生はすべて鈴木研究室所属であったが、その後、渡辺研究室に片倉正彦助手が赴任され、交通流を研究する学生が渡辺研究室にも所属する事になる。社会工学科へ鈴木研究

室が移り、菅原操教授、中村英夫助教授、内山久夫助手が社工に加わって、土木計画を希望する多くの学生が、所属は土木、研究室は社工という時代が1974年まで続いた。菅原先生、中村先生は東工大を去られ、行き場のない筆者は渡辺教授に救済され、一時的ということで土木工学科助教授として受け入れて頂いた。結果的には、助手、助教授、教授として、29年2ヶ月という長期に渡って東工大でお世話になった。まさに大学生生活の大半を過ごさせていただき、心に浮かぶのは良い思い出ばかりである。

かつて土木工学科に在籍し、今、計画分野の大学人として活躍している人は数多い。内山-理科大、稲村-東北大、永井-宇都宮大、鹿島-中央大、石田-筑波大、田村-室蘭工大、屋井-東工大、土井-香川大、岩倉-芝浦工大の各教授、兵藤-海洋大、岡本-筑波大、浜岡-秋田大、高田-東京電機大、清水-東大、寺部-高知工大、小川-立命大、Karl-フィリピン大、東工大現職の藤井、福田の各助教授と、この分野だけでも実に多くの人材が来たり、羽ばたいて行った。社工や開発、総理工を加えると更に多くなる。勿論、大学以外で活躍する人材は数え切れない。一番小さい研究室であった計画分野でさえこういう状況であり、学科全体では文字通り膨大な人材を輩出してきた。今、学会や、学外で仕事をするとき、東工大土木の卒業生と会わない日は少ない。日本最小の土木工学科であったこの組織が、40年を経てよくぞここまで存在感を示すようになったと、すべての関係者に敬意を表したい。

ところで、規模の小ささは大きな強みでもあった。先生方は文字通り個々の学生の教育、研究、就職等に熱心であり、一人一人の性格まで把握した上での接し方であった。例えば、吉川秀夫先生に言われて訪問したら就職試験で、会社で筆記用具を借りて受験したという、当時、大学封鎖のリーダーであった大島一哉氏（2期生）は、今、一部上場企業の社長であり、土木学会の副会長でもある。筆者も分野が異なるのに、毎日の様に夕方に

なると、吉川先生から教えられたり、説教されたりであったが、福岡捷二助手からは、なぜ、よその助手にこんなに時間を使われるのだろうと不思議がられるほどであった。先生にとっては研究室の壁などなかったのである。その頃の吉川先生のハザードマップ導入に対する熱意はたいへん印象的で、導入は難しいと言う建設省を強く説得しておられた。筆者もその影響を30年後に受け、今回、土木学会会長特別委員会で国民の防災意識向上のための教材を作るに至っている。別の研究室の先生方や学生とも、教育や研究の議論は勿論、釣り、ゴルフ、麻雀、お酒と、遊びも盛んであった。多くの同分野の研究者を擁する学科と違い、講座の分野割もなく、興味のおもむくままにテーマも設定できた。学科内での専門的議論をする相手が限られたことから、他大学や国立研究所の多くの先生や研究者の門をたたき事も多くなり、かえって世界が広がった。学生にも、自分では教えられないから、他大学の先生に教わってこいなどと、無責任な指導をする事も多かった。また、1968年から東大に異動となる1996年まで、毎年夏には数日間の合宿で早朝から深夜まで集中的なゼミをやり、そこには卒業生も招いた。卒業生は好きなゼミにだけ参加していい事にしてはいたが、年齢の違う卒業生が社会人になっても交友関係を維持しているのを見るのは楽しい。

小さな組織で合意形成が容易であり、また、歴史が浅い事も、新たなルールを作る上で有利であった。40年を経て東工大の伝統らしきものが形成されているとすれば、このような事、即ち、小さな組織の良さも、その背景としてあるのではなかろうか。

学科設立当時の意気込み、その後培われた学科の良さにも、時には思いを巡らせ、現在の立派な研究教育活動と卒業生たちの幅広い活躍に満足することなく、また、学内に広がった多くの組織の土木系メンバーとも協力して、小さな学科であったが故の良さを残してほしい。たぶん、東工大土木の伝統の源泉は、そこにある様に思うからである。



平成元年頃、屋井鉄雄君（写真左、13期）、伊藤敏克君（写真右、22期）と共に。

人との出会い（人生転換の8年間）

太平洋セメント・建材カンパニー・事業推進部長

岡本 享久

東京工業大学土木工学科設立40周年おめでとうございます。土木工学科在職期間中、1985年の20周年記念誌作成に際し、自ら撮影した「白亜の緑ヶ丘1号館を背景に春爛漫の桜を強調した写真」が記念誌・表紙に応募・採用されたのを昨日のように思い出します。私にとりまして、人との出会いの8年間でその後の人生に大きな影響しました。

1982年2月1日に広島大学から東京工業大学・土木工学科・長瀧重義先生の研究室の助手として赴任しました。出会いはすぐに始まりました。赴任当日の夜、長瀧先生が小野紘一先生とのご面談の機会に、歓迎会を新橋で開催して頂きました。

「郷に入っては郷に従え」を肝に銘じ、既存経験を極力白紙にしての研究生生活の開始でした。赴任時は卒論修論作成中、坂井先生、馬場さん、氏家さん、戸矢さん、菊沢さんの職員の方々、研究生の竹内さんに、寝不足で顔色の悪かったM2の大賀宏行さん（東京工業大学を経て都立大学に、1999年3月他界）、遠藤達巳さん（電力中央研究所に、2003年3月他界）と学部生の斉藤さん、中村さん、河村さんがいました。その後、大賀さんとは同一職場で長いお付き合いが始まり、最後には戦友の関係に。悔しいですが長瀧研究室・1982年修士修了者は全て他界しました。寂しい限りです。

赴任2週間後、長瀧先生から「学位は、フライアッシュか、ねじりの研究か？どちらを希望しますか？」と尋ねられ、即「ねじりを」とお答えしました。当時の実験室にねじり関係の実験器具が無く、資金不足から、実験工場内での鋼材拾い、加工、器具作成、まずは100×100×400の極小試験体での実験開始でした。「コンクリート構造系の研究は、実験も大事ですが、普遍性を構成式で表現を。」との長瀧先生のコメント。研究資金に悩んでいましたら、営団地下鉄からトンネル内ひび割れ調査依頼、佐藤良一先生、内田明さん、故野尻陽一さん、故山田一字さんなどの強力なご支援から、その後、日本最大級の「ねじり」の実験体制が築け、示方書にも成果が反映されました。ねじり関連をはじめとする委員会活動から、

関東若手コンクリート研究会が発足、魚本先生、二羽先生、睦好先生、前川先生などとも交流が今でも生きています。研究環境が大変良かった時代でした。

強調すべきは、当時の「土木工学科・助手会」、団結力と行動力が抜群でした。「東工大・土木は助手会で持つ!？」との気概も皆さんお持ちで、良く遊びよく勉強しました。

以上はほんの一部、その後の「診断、補修、景観評価」の研究から、さらなる密度の濃い出会いが、討論、解決策提案、……の連続で、雪だるま式の交流・拡大でした。その後、縁あって日本セメント（現太平洋セメント）に、富田六郎さん、藤原浩巳さんなど更なる出会いがあり、今の私に大変な力になっています。

生々流転、変化に応じてドンドン変わらないと付いていけない今。しかし、「信義は不変」でないと長続きはしない時代に、東京工業大学での約8年間の出会いは人生の基盤です。今なおお付き合いを頂いています東京工業大学での研究生生活でめぐり合った方々に感謝しています。



1988. 4 学科行事（大賀宏行氏、洋子夫人と一緒）

東工大の思い出

日本大学教授
野村 卓史

東工大土木工学科の設立40周年を心よりお祝い申し上げます。設立20周年のときは、私の在職7年目でしたので、いつの間にか、東工大土木の歴史の前半に属することになったかと思うと感無量です。改めて丘友の名簿を手にとると、私のイメージにある厚さと比べてとても厚いものになっていることになっておりました。

東工大は私の最初の職場であり、20代から30代半ばまでを過ごしたところです。学生気分が抜けないうま助手に採用され、教育者としても研究者としても資質と準備が不十分でしたので、吉田裕先生には非常にご苦勞とご迷惑をおかけしてしまいました。たいへん申し訳なかったと思っております。大学教員としてこんにちまで何とかやってこられたのは、そんな私を一から徹底的に鍛えて下さった吉田先生と東工大土木のおかげです。

研究の場として、教育の場として、東工大土木では、日々、熱意がほとばしる時間が刻まれていました。前諮問から始まって深夜のレポートチェックで終わる毎週の学生実験。本番さながらの模擬試験が毎週実施された公務員試験指導。一年間の成果を短時間に凝縮させるために、ほとんどの教員と学生が前夜泊まり込んで発表練習を繰り返した卒論発表会。数えれば切りがありません。夏期実習の担当教員として、学生さん一人一人と面談して希望をきいたり、実習に対する注意を与えたりした経験は、現在の職場で夏期実習制度を立ち上げるときに大

いに活かさせていただきました。

とにかく学生の皆さんと非常に密着した毎日を過ごしていました。どうして毎日のように緑ヶ丘や自由が丘に飲みに行ったり、研究室に泊り込んだりする時間とお金があったのだろうか、と不思議に思いますが、その積み上げた時間がほんとうに大事な財産になったと思います。助教授になって自分が卒論に責任を持つ学生さんができたときは、たいへんな緊張の毎日でしたが、なぜか年が押し詰まったときに研究室旅行に行くことが慣例となつて、川治や伊豆のひなびた温泉宿に泊まりにいったことなど、とても懐かしく思い出します。

写真は、助手に採用されたその月に実施された教室旅行のときのものです。こういう行事の幹事を担当する研究室が年度ごとに決まっていた「芸能講座」と呼ばれていました。着任早々、吉田先生に「実はことしはうちが芸能講座なのでよろしく頼むよ」といわれたときは、いったい何のことかと思いましたが、このときはすでに段取りはほとんど終わっていて、私が実際に行ったことは、コンパの席を決めるくじを作ったぐらいだったと思います。このような教員間の交流、「助手会」のリクリエーション、など、教育・研究に切磋する日常のプレッシャーの強さに比例して、大いに楽しむ職場でした。

心よりの感謝を込めて、東工大土木の益々のご発展をお祈りいたします。



東京工業大学土木工学科職員夏の旅行 於 南熱海 松風苑 54.8.24

理系の大学同窓会に寄せて

土木工学専攻連携助教授 千代田化工建設勤務

松川 圭輔

東京工業大学大学院土木工学専攻にて客員の身分で教壇に立たせていただくようになってから早いもので5年となりました。私はプラント業界の職場に勤める関係上、海外の仕事が多く、日本とは最も遠い文化圏にあると感じられる中東の顧客、構造計算の得意なインド人のエンジニア、言葉巧みに芝居をするイギリス人のコンサルタントなどに付き合う中で感じる対抗意識、および彼らが日本人に期待していると思われることなどをもとに、「日本人よ、国内のぬるま湯につかっていてよいのか!」というきわめて偏ったメッセージを、建設マネジメント特論という授業で発信しております。学生さんには、アメリカ大学院流にどっさり宿題を出すことが不評なせいか、毎年受講人数が減っていますが、それでも方針は変えずに秋学期の14コマの授業を他の非常勤講師の方々と一緒に創っております。


日本がバブルの頃、私は米国インディアナ州のPurdue（パデュー）大学の土木工学科の大学院で学ぶ機会を得ました。ここは月に初めて行った宇宙飛行士を送り出したという工学部の有名な理系の大学で、とうもろこし畑のど真ん中の大学以外には何も無い町にありました。米国の学校には、それぞれNicknameが付けられているのですが、パデュー大学は、Boilermakerと呼ばれています。これは昔、フットボールの試合に少し体のでかい機関車の整備工たち(Boilermakers)を学生と偽って出場させたことに由来するそうですが、他の大学の強そうで格好良い、Blue Devils, Cardinals, Longhornsなどに比べると、とても変わったあだ名で、しかも工学系のイメージを与えていました。インディアナ州は、冬はとても寒く、勉強以外にすることがありません。ですから、米国西海岸のような華やかなCampus Lifeとはかけ離れた地味な環境で、しかも宿題のどっさり出る授業に苦しみ、かつ実験と論文に苦しんだ思い出があります。「あんな（つまらない）ところによく居たね」とアメリ

カをよく知る日本人の友人に言われたこともあります。

数年前、ロスアンゼルス近郊に環境浄化機器を製造販売する小さなベンチャー企業をたずねたときのこと、年配の創業者と話をしていたとき、ふと壁にかけられた額に、Purdue大学の文字を見つけたところ、そのおじさんは“Are you a Boilermaker?”と急に笑顔になって握手を求めてきました。これが私のアメリカでの同窓生の経験です。化学工学卒というその人は、おそらく石油化学系の大企業を定年後、このベンチャーをはじめたのでしょう。今、気候温暖な西海岸に移り住んではいても、かつてあの冬の寒い、とうもろこし畑のど真ん中で偏微分方程式を解いていたということが、年の差や国籍の違いがあっても、連帯感をもてる理由だと思います。

この理系の大学に学んだという連帯感は、東工大にも共通するところがあるように思います。さらに日本人だからわかることとして、東工大のOB、OGに対して、さすが理系の大学だけあって算数に強くて独創的だが、ユニークで少々変人的な（失礼!）、という形容詞がつく評価を周囲はしがちであることを私は知っています。この固定概念を時には利用し、時には迷惑に思い、でよいのではないのでしょうか。ちょうど、Boilermakerが、あのとうもろこし畑の……と言われる宿命と同じように、どちらも、理系の大学ランキングの上位に顔を出すという実力を背景に社会で活躍するパワーに対する、世間のやっかみといったところでしょう。

わが国のcivil engineerが変革の時期にある今、多くの大学のcivil engineering departmentの教育も変わろうとしています。その中で、最も理系的な教育をしているとも言われる東工大のcivil engineeringコースで、Construction Managementの授業では、「今年のクレーム案件は2勝2敗だった」などという雑談をし、ちょっとだけ視野を広くもって、というメッセージを送る予定です。



東京工業大学土木工学科40周年の お祝いの言葉に代えまして

横浜国立大学助教授

佐々木栄一

東京工業大学土木工学科40周年おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私は、平成9年4月より、8年間、東京工業大学に、博士課程の学生、寄附講座教員、助手と立場を変えながら、東京工業大学土木工学科に在籍しておりました。その中では、三木千壽教授、市川篤司教授をはじめ、多くの先生方に辛抱強くご指導、ご鞭撻頂きました。東京工業大学での経験は、私の心の礎となっております。平成17年4月から、母校横浜国立大学に異動しまして、東京工業大学での経験を活かしながら、新しく、強く展開していけたらと思ひ精進しております。

私は、8年間の在籍中助手としての立場で多くの時間を過ごしました。学生実験では、Steel Bridge Competitionを始めて、学生たちを連れてアメリカの大学に幾度か挑戦する機会も頂きました。多くの思い出がございましたが、土木工学科に関連して特に印象に残っているのは、「助手会」の存在です。「助手会」は、東京工業大学土木工学科のひとつの特徴として挙げられると思います。私も6年半助手会のメンバーでございましたが、東京工業大学での思い出として、「助手会」での思い出は大きいです。土木工学科の先生方にも、助手会メンバーだった方が多くいらっしゃいます。「助手会」が存在し、助手

同士のつながりの強い大学、学科は他には見受けられません。助手同士が研究分野の垣根を越えてお互いに支えあいながらやっという意識があり、それが東京工業大学土木工学科の強さのひとつではないかと思えます。助手会にいらっしゃった先輩方、同僚、後輩の方々、楽しく飲んだり、まじめに議論したり、強い印象に残っています。そこで培ったつながりは、今後も大きな財産として心に残っていくものと考えております。

また、東京工業大学土木工学科には「丘友」という強靱なつながりを持つ同窓会組織があり、優秀な方々の集まりとしてその存在を示しています。1000名を超える規模となってくると、運営なども大変なことと思いますが、「丘友」の存在も東京工業大学土木工学科の大きな力となっていると思います。

土木工学の分野は、岐路に立たされている状況ではありますが、ただ、これまでの新しいものを作る技術に加えて、今あるものを長く使う技術、低環境負荷の社会基盤整備、維持管理技術の確立などが重要となり、国際的な視野に立っても東京工業大学土木工学科の役割はやはり大きいのではないかと思います。今後とも強靱な力を誇る東京工業大学土木工学科の更なる発展に注目いたしております。以上、お祝いの言葉に代えまして。



寄稿（卒業生）



卒業生

成田 国朝	S 43年卒	早川 康之	S 44年卒
児玉 勇太郎	S 45年卒	石塚 敬之	S 45年卒, S 47年修
森藤 真治	S 46年卒	清宮 理	S 46年卒, S 48年修
秋元 邦夫	S 47年卒	増田 陳紀	S 47年卒, S 49年修
田中正典	S 48年卒	北川 明	S 48年卒, S 50年修
宮永 洋一	S 49年卒, S 51年修	市川 篤司	S 50年卒, S 52年修
村田 和夫	S 51年卒, S 53年修	グエン・ソン・フン	S 52年卒, S 54年修, S 57年博
加納 敏行	S 52年卒	和田 一範	S 53年卒
山坂 昌成	S 54年卒, S 56年修, S 59年博	米山 晋	S 55年卒, S 57年修
奥村 文直	S 56年卒	野崎 誠貴	S 57年卒
16 期 有志		兵藤 哲朗	S 59年卒, S 61年修, H 1 年博
末政 直晃	S 60年卒, S 62年修	廣岡 明彦	S 61年卒, S 63年修, H 3 年博
中村 宏	S 62年卒, H 1 年修	岡本 直久	S 63年卒, H 2 年修
岡村 未対	S 63年卒, H 2 年修, H 5 年博	悦道 博之	H 2 年卒, H 4 年修
中島 英夫	H 4 年卒, H 7 年修	宮里 心一	H 6 年卒, H 8 年修
戸田 祐嗣	H 7 年卒, H 9 年修	一ノ瀬 広樹	H 8 年卒, H 10 年修
小沢 一喜	H 10 年修, H 13 年博	Enrico C. Paringit	H 15 年博
Wanchai Yodsudjai	H 12 年修, H 15 年博	森井 順之	H 11 年卒, H 13 年修
吉野 広郷	H 12 年卒, H 14 年修	村田 裕志	H 13 年卒, H 15 年修
高橋 和也	H 16 年卒	久保 陽平	H 17 年卒

創設期の一員として

愛知工業大学：S43年卒

成田 国朝

東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された昭和39年（1964年）に、東工大理工学部で約750名の一員として入学しました。当時は2年生から希望に応じて学科に振り分けられるシステムでしたので、1年生の最後に、さて、どの方面に進もうかと思っていた時に、土木工学科が新設されると聞き、何気なく、と言うより、より積極的に“一期生”になれるという単純な動機で土木の道に進み、現在に至っています。

さて、2年生になってみて、土木の授業が殆んど開講されない状況の中で、初めて接した土木の教官が故山口柏樹先生でした。何の科目か忘れましたが、真新しい白衣で教室に来られ（この頃、何故か先生方は白衣を着るのが流行っていました）いきなり最小自乗法の講義と称して、それこそ“立て板に水”式に黒板にエンドレスに独特な文字を書かれ、何はともあれ必死でノートをとったことが、今でも鮮明な記憶として蘇ります。その後、木村先生が助手として登場、次に伯野先生の冗談話を交えた構造力学……など、少しずつ土木の教員が増え、授業が充実してきました。写真は、2年後期の春休み前？

に、沼津の建設大学校の宿舍を借用して行われた、土木初の測量実習合宿の様です。合宿の最後に、何人かの学生は本物のブルに乗って整地作業を体験させてもらいました。この合宿では、うるさい規則などはあまりなかったようで、夜は沼津の町に遊びに行ったり、長瀧先生差し入れのウイスキー（一升瓶入りの45Whiskeyという名前だった？）を車座になって飲んだり、麻雀が好きな連中は部屋にこもって戦ったり、そして最後の日には先生方と一緒に酒を飲んで打ち上げをしたり、結構懐かしい思い出を蓄積しました。

4年生になって、やっとこ緑ヶ丘に土木・建築棟が完成して本拠地をもてるようになり、教員がほぼ揃った状況で、1年間の研究室生活を楽しみました。卒論発表では、いわゆる青焼きで原稿を作り、模造紙に図面を描いて掛け図で説明する、といった程度に昔の話です。先生方とともに色々な初体験をして、最後に同窓会「丘友」を発足して、何とはなく“俺たちが始めだ”という感覚で一期生の役得を楽しんだ学生生活でした。



土木最初の測量合宿

丘友Ⅱ期 有志17名 東工大正門前にて

鹿島建設(株) : S44年卒

早川 康之

定期的に集まり情報交換を行っている連中(せいぜい4~5名)が、この日、40周年記念誌に掲載し長くその雄姿を飾ろう、と17名が参集し記念撮影を行った。だい

ぶ生え際が後退し、白いものが多くなってはいるが心意気はまだまだ青年!各人、今の社会的立場を守り、もう一段駆け上がる気概あり。



腹を据えて発展に尽くして

(株)マネジメントシステム評価センター：S45年卒

児玉勇太郎

土木工学科発足から40年が経つということは、とりもなおさず最初に土木工学科に入った人たちが、そろそろ定年を迎え、社会の第一線を退く時が来たということである。40年を振り返るということはそういう意味で、意義が深い。この40年間ほどの反省を少しでも、今は盛りとして働いている人たちや、これから卒業して社会に出ようとしている人たちに伝えることができれば、と思う。

土木工学科3期の我々が卒業したのは1970年。70年安保の学生運動も終わりつつある時だった。それからの20年程の間、バブル経済の崩壊に見舞われるまで、日本経済はいくつかの難関を乗り越え、順調に発展してきた。その間に、2回のオイルショック、円高ドル安があり、ピンチに立たされたものの、その難関を乗り切ることができた。

プラントメーカーに勤務し、通算5年以上にわたりアラビアの国々で仕事を経験した私にとって、オイルショックと円高ドル安は会社そのものの存在を脅かす重大な脅威だった。国内マーケットへの依存の大きい建設業界への影響は限定的だったかもしれないが、造船や鉄鋼をはじめ輸出に多くを依存する業界では同様な激しい衝撃を受け、必死で危機からの脱却を図ってきた。

そこから、80年代後半のバブル景気に入る。日本経済は沸きに沸いた。建設業界もこの恩恵をフルに受けた。個人所得でアメリカを上回り、日本人は世界のトップグ

ループに入った。しかし、これは所詮砂上の楼閣。やがてバブルは崩壊し、日本は混迷の時代に入った。今、日本は再び立ち直り始めたとは言うものの、膨大な公的債務、少子高齢化など解決のメドも立たない困難な問題が山積している。中でも建設業界は立ち直りが遅れ、まだまだ縮小均衡のためのリストラを続けなければならない。

なぜ日本はバブルに踊り、これほどにも深い傷を負ってしまったのか。明快な答えは私にはよくわからない。しかし、そこには日本人一人ひとりの心のもち方にも問題があったように思う。我々は、目先の利益だけに囚われるようなことはなかっただろうか。何が自分たちの使命なのか、何が正しくて何を我々は本来なすべきなのか、を常に問い正してきただろうか。ビジネス上は、時には妥協もあるだろう。しかし、守るべき基本線はしっかり守らねばならない。そのために目先の利益を失うことがあってもそれはやむを得ない。目先の利益に振り回された後の代償がどんなに大きなものであるかは、バブルの崩壊がよく教えてくれているのではないか。

この40周年を私は58歳で迎えた。もうしばらくは現役で働くつもりである。卒業生の大半を占めるもっと若い人たちや、これから卒業して社会に参加する人たちにお伝えしたい。目先の利益だけに振り回されず、腹を据えて仕事に取り組み、日本や世界の発展に尽くして欲しいと。



3期卒業式謝恩会（1970年3月）

今は昔の物語

(株)TTES : S45卒, S47修

石塚 敬之

少し前に自宅を引っ越した折、2枚の昔懐かしい写真が出てきました。

1枚目は測量合宿の時の写真です。前列中央が現在の三木教授。場所は確か沼津の方の（あるいは富士山の麓の）建設大学の敷地でした。測量のクラスは中村英夫先生が担当でした。高い精度を要求される計算をタイガーの計算機を使ってやったことが思い出されます。また、夜は先生・助手の方々の目を盗んで町にのみに出かけました。目を盗んだつもりだったのですが何故かバレてしまい、『チクった奴は誰だ!』なんて話にもなりました。

2枚目の写真は水理実験の時のもの。実験が終わると

すぐにレポートを書いて先生方に結果を説明して考察を報告する。吉川先生の大きな目がとてもプレッシャーになっていたことを記憶しています。当時の計算は写真にあるように計算尺。私たちが学部学生の頃から大学全体には大型コンピュータが入っていましたが、土木工学科に計算機が導入されたのは私が大学院に入った頃で、HITAC-10という確かメモリーが4Kの計算機が科内に備えられ、結構な部屋を占領していました。個人の電卓が普及し始めたのは1972年に就職してからで、四則演算ができ、メモリーが一つついてルートの計算ができるシャープの電卓が2万5千円くらいしました。今は昔の物語です。



卒論「ソーメンメソッド」

東急建設：S46年卒

森藤 眞治

正式な卒論名は「遠心载荷装置よる斜面の安定」である。

今は亡き山口教授、そして前学長をなされた若き時代の木村助教授に教えを請わんと、土質研究室に入った。

もともと勉強は好きなほうではなかったので3年生までは麻雀工学に連日勤しんでいたが、さすがに卒論を控える4年生になると少しは勉学に目覚めた。卒論の選択の時期に入り、みみず文字の計算式より体を使うことを好むので、数多くある卒論のテーマの中でも最も腕力いや技術力が必要そうな、しかも目新しい取り組みでもないものかと物色した。丁度、土質研に「遠心载荷装置」が導入され、初年度の実験がスタートすると聞き、清宮君（現早稲田大学教授）とペアを組み、実験の手元をやらせていただくことになった。原理は比較的簡単である。粘土を入れた槽に斜面を作る、槽を回転させ遠心力により重力加速度を増加させる。1gの倍率分だけ斜面の高さが小さくて済む、すなわち10cmの斜面高さで100gまで回転をあげれば、10mの斜面の高さを実現したことになり、容易に斜面の安定実験ができる。

なにせ大学でもこの装置を導入したばかりなので、手探りでことが進んでいった。粘土を槽に入れた段階ではとろとろ状態であるので、どのくらい時間をかけて圧密すればよいのか、強度はどの程度上昇したのか、過剰静水圧はかかっているのか、斜面は高さが低ければ崩壊しないし、高ければ槽壁により境界条件が悪化する……このような試行錯誤が続いた。バランスが悪く、回転数を上げた時に大きく振動し、装置本体が移動したことさえあった。槽に粘土を入れ、バイブレーターで不要な空気を抜くことや斜面の築造も徐々に上達していった。

さて、槽の粘土に斜面を築き回転数を上げれば斜面は見事に崩壊し、最終の表面形状はわかるのだが、土中でどのようにすべっているのか、本当に円弧すべりが生じているのかは全くわからなかった。

そのような時に知恵を出す人はいるものである。圧密を終えた粘土を削って斜面を槽の中に作った後、槽のガラス面に沿って自転車のスポークで重力方向に細い穴を開ける。この穴にマジックで目印を付けたソーメン（素麺）を挿入する。硬かったソーメンも粘土の水分を含んで柔軟になり斜面の崩壊に追随するといった算段だ。

慣れないうちはソーメンを挿入する際ポキリと折れたり、もたもたすると途中で柔らかくなってしまい槽底まで挿入できない。何度も繰り返すうちにコツをつかむことができた。いよいよソーメンメソッドによる斜面の崩壊実験である。载荷装置の回転数を上げていくと、250rpmで斜面の基底部が少し変状し、340rpm（約150g）ではくっきりと円弧地すべり面が現れた。円弧すべりは教科書では何度も見たことはあるがあくまでも単なる図であった。実際の斜面で崩壊があっても地下の様子は見られない。それが、実験とはいえ本物の円弧すべりを見ることができるとは大々感激であった。（写真）その後斜面の勾配を5種類に増やし、XYアナライザーを用いて図化した上で安定計算を行った。



現在は载荷装置も三代目になり、すべり面の確認にもVTRによる画像解析を使っているようで隔世の感があるが、ソーメンメソッドと歴然と現れたすべり円弧は今でも鮮やかにまぶたに焼き付いている。なお、同メソッドを考案されたのは藤井助手（現中央大学教授）である。

本稿を記すにあたり、古い資料を保管してくれた清宮君と34年振りに卒論を読んだが、しっかり書けると共に自画自賛した。字体も、今も昔とさほど変わっていない。さらに、実験に用いた粘土はJR横須賀線の新橋地下駅工事現場で採取したものであると記載してあった。卒論を無事終え何かご縁があったのか、日本鉄道建設公団に就職し、鉄道の建設に長く携わることになった。東北新幹線、北陸新幹線、京葉線等多くの路線

の建設に従事しその間、直接斜面の安定に関する業務はわずかであったが、基本となる考え方や業務の進め方は本実験を通じて培われたものであり、この場をお借り

してご指導いただいた教官各位に感謝申し上げる次第である。



4期5周年パーティー：1976年

40周年にあたっての感想

早稲田大学：S46年卒，S48年修

清宮 理

大学を卒業して早30年余が経っている。東工大土木工学科卒の最終学歴の名前が、未だ自分の名前の前に書かれていることに最近不思議な気がしている。学内の申請書類、博士論文の審査書類、種々の調書に自分の名前、現職名、卒業大学名は必須項目である。ここまで卒業大学名が付いて回るとは学生時代に想像は出来なかった。運輸省時代は46年東工大卒が私の名前にいつも付いていたが、これは役所独特の学歴社会だと理解していた。しかし役所を出てからもこの手の話が一般的であることに驚いている。

東工大土木工学科は、昭和39年に創設された東工大でも新しい学科である。旧帝大、歴史ある私学などの土木工学科と比較して長年の基盤が無い条件下で、創設時代から先生方および各分野に出た卒業生は多くのハンディを背負ってきたと考える。しかしこの40年間の活躍で今や土木分野での東工大の立場は、前述の大学に互していると自他とも認められる状況になった。官庁、ゼネコン、コンサル、大学などの土木分野での中枢に東工大卒

が大勢いて（数は少ないが目立っているかも）、一緒に仕事をする機会も多い。巷では東工大は頭硬大かと言われるほど職人肌のきまじめな学風であるが、土木工学科卒業生はこのカテゴリーには入っていないのが良いところである。入省時東工大の先輩が上の方に全くいなく、他大学の卒業生同士がグループ化しているのを横目で見、前途の人間関係構築の難しさを感じたこともあった。40年の期間は、このような状況を払拭してくれ役所、会社などでは今や一大グループまでになってきている。現在の学生も丘友に入り続ければ、更に大きなグループになるし、卒業生の進路の多様化から土木の分野に進まない学生も増え続けているが、戦友会、旧制高校の同窓会のように若者が入らないグループとならないので今後の丘友の存在が大いに期待される。組織化されたグループに所属することを嫌う人もいるが、自分の存在場所をしっかり確立しておくことは、社会活動をしていく中で大変重要なことではないか。これは世界に出た場合、多国籍の中で日本人であることの自己認識の上に活動するこ

と同じだと思います。

ところで4期生もこの年になると役人はほぼ全員退職し、当初民間に入社した人でも第二の職場に転職する例も次第に出てきている。残念なことだが既に数人鬼籍に入っている。この四期は、昔から結束が良くして四水会を組織している。四水とは第四水曜日の夜に、今は無くなった新橋駅前の蔵前工業会のサロンで酒を交えて談話する会合である。周囲も他学科の卒業生の談話グループで盛況であり、懇談場所が消えたのは大変残念である。サロンが無くなってからはさすがに場所の問題もあり月ごとではなくなったが、四水会は今も継続している。また季節ごとにゴルフコンペを行っている。メンバーも最近は

やや固定気味であるが毎回3組程度参加である。和気藹々として息抜きと情報交換の会場である。社会人とはいえ言葉使いは学生時代と同じランクである。さすがにゴルフの腕はこの年になるとピークが過ぎている気がするが、今まで倫理規制から参加の少なかった公務員も、退職後に参加が増えてきた。私にとってもゴルフの機会がこの四水会で確保されており、大変貴重な存在であり健康である限り参加し続けたいと願っている。写真は30周年に水上温泉で当時の先生方を招待した宴会と翌日のゴルフコンペでのスナップである。黒髪は多くないが、黒目の輝きは学生時代と同じでないか。



4期30周年記念パーティー



4期30周年ゴルフコンペ

緑ヶ丘の想いで

(株)熊谷組：S47年卒

秋元 邦夫

私が土木工学科に進んだ年は、土木に人気があり、伝統ある建築学科よりも希望者が多く難関であった。1年次の3月に選抜試験が行われたが、試験科目は一般教養の数学、物理であったと記憶している。試験監督は、椎貝博美先生（現日本河川協会会長）と木村孟先生（元東工大学長、現大学評価・学位授与機構長）が担当していたと思う。いざ試験が始まると、勉強不足がたたり私にとってかなり難解だった。椎貝先生に、無理を承知で問題の趣旨を尋ねてみた。意外や意外、先生は微に入り細に入り懇切丁寧にご指導して下さった。そのお陰で、何とか回答することで、希望の土木工学科への配属が許可となった。以前より、男性的な土木に憧れていたが、諸先生方の献身的な指導、素晴らしいお人柄、学科の家庭的な雰囲気、土木を改めて惚れ直したのであった。

土木の仲間で連帯感が増したのは、3年の春に行った長野県木崎湖寮での測量実習である。班毎の作業だったが、私はもっぱら器械は覗かず、楽なスタッフマンに徹していた。昼間の測量作業は兎も角、楽しかったのは夜だった。飲むほどに人柄が分かり、後々の付き合いの参考になった。今でも強く印象に残っているのは、金森君（国鉄に就職）であった。実習では、地下足袋を履いて忍者の如く駆け回り、酔えば十八番の「ヒョッコリ・

ひょーたん島」を熱唱(今でも懲りずにやってるらしい)。学生時代の楽しい思い出の一つである。

私が所属したのは、土質の山口研究室であった。山口柏樹先生は、大変威厳があり、近寄り難い存在で、土質の授業でも目を合わせないように努めた。質問されて、答えに窮するからである。そんな大先生の研究室に所属したのですが、先生と面と向かってお話をしたことも記憶のかぎりではない。当然、学業で誉められたこともない。唯一お褒めの言葉を頂いたのは、定期的に研究室で催された飲み会である。当日は、夕方、緑ヶ丘のマーケットで食材を調達し、腕に縋りをかけて「おでん」を調理し、これを召し上がった先生の感想は、「秋元君、これは、銀座の一流おでん屋より旨いぞ!」であった。後にも先にも、先生から誉められたのはこの時だけである。

卒業研究のテーマは、「遠心載荷装置による支持力実験」、担当教官は、藤井先生（現中央大学教授）、相方は田代美樹男さん（鉄道建設公団に就職）、同じテーマで修士論文のJ.B. セナナヤカさんであった。主な作業は、標準砂を鉄製容器に詰め、載荷装置に取り付け実験をするのだが、その容器の重いこと。田代さんと二人がかりで行う作業の傍らで、セイロン（現スリランカ）貴族出身のJ.B.さん、体はデカイが「ハイ!ハイ!」と掛け声だけ。卒業研究は、頭を使うと言うより肉体労働であった。



田代さん、J.B. セナナヤカさん



秘書に囲まれる筆者

終わりに、不肖・秋元が、卒業式の学科総代を務めることとなったのも、成績ではなく、アイウエオ順で代表

を決めてくれた同期の皆さんのお陰であり、この場を借りて感謝する次第である。



土質研のメンバーと研究室の花（前列）

昭和50年頃の緑ヶ丘・丘友の思い出

武蔵工業大学：S47年卒，S49年修

増田 陳紀

昭和49年に修士課程を修了し、そのまま吉田裕助教授の下の助手に採用された私は、同期では大学に残った者が一人だったので、同窓会の用事を手伝うことになりました。因みにこの年は、運輸省港湾技研より中瀬明男先生が教授として就任（一説によれば、同期の加藤一正氏（現独立法人空港港湾研究所理事）が同研究所に就職することとなりトレードであったということですか!）された年でした。当時は同窓会の役員といっても、私で5期生ですから、会長が卒業後6年目の1期生澤本正樹さん、丘友正会員総数は若干270名弱で、特に何かをしたわけではなく、翌50年頃実質的には初めての総会が開かれたように記憶しています。私は50年頃より幹事となりましたが担当会務は、適宜届けられる異動届を管理し名簿の修正を行うのが役割で、お陰で、諸先輩（および同輩・後輩）のお名前・異動先に関する情報にたっぷりと触れることができ、ある意味で大変な人脈を得ることができ

ました（当方の片思い的な部分が大半ですがそれでも名前くらいは覚えて頂いているように思います）。

この時期、研究と学生指導および同窓会会務の他には、研究室大学院生や卒論生との夜の息抜きの時間が大変楽しく、今でも親しく付き合う間柄となっています。また、当時の助手仲間（今では大先生の先輩・後輩も多く、気安く仲間と称するのは憚られもしますが）には、忘年会等でクッククッカーを熱唱された竹内邦良さん（現山梨大学教授）、酒の席でも研究の話に熱が入る山田正さん（現中央大学教授）、を初めとして大変多くの気鋭の若手研究者が割拠し、刺激を受けつづけました。現在、学会等でこういった方々と屡ご一緒させていただき、改めて当時の学科経営陣の洞察力・先見の明に感心いたしております。

話が横道にそれましたが、確か昭和53年頃、長らく会長を勤められた澤本さんが東北大学に転出されたため、

新たな役員陣容とすることになりました。その際、今後の同窓会およびその基となる学科そのものの更なる発展のためには若い卒業生ではなく、業界に顔の利く教官に同窓会の看板になって頂きましょうということで、最年長の教授（当時は西村俊夫先生）の方が会長になられる現在の体制ができました。これは結果的にも大変良い判断で、今日の卒業生の各分野での活躍の強い後押しになっていると思います。

会長は最年長教授となりましたが、会務の実質的な部分は副会長である卒業生が掌握することは変わりません。新たな体制での副会長にはたぶん3期生の三木千壽さんが就任されたのではなかったでしょうか。ところが、三木さんが長期海外出張することになり、緑ヶ丘には卒業生が私一人の空白の時期となりました。この間、まさにショートリリーフとして副会長を仰せつかったことが、この拙文に繋がったというのが落ちになります。



5期第一回同窓会（1976、新橋蔵前工業会館）



澤本先生、三木先生、増田（浦賀ベリー提督上陸記念碑前、1977）

6期の思い出



東日本旅客鉄道(株)：S48年卒

田中 正典

学部6期（昭和48年入学）の私達は、一年生の夏まで大学紛争の影響でまともな授業は受けられず、本格的に大岡山で授業が出来るようになったのは、秋になってからです。

考えようでは、3年半で効率的に卒業したことになります。2年になるときに、希望に成績も合わせて専攻学科が決定しました。私は漠然と大きな仕事をしたいという理由から土木工学科を選択しました。当時の土木工学科は新設4年目で、新進気鋭の先生方の下、伝統大学に負けないという気概と家族的雰囲気溢れていました。授業風景より先に思い出すのは、遊びと失敗の場面です。階段教室で測量学の授業中に私語を見つかり、チョーク

が正確に飛んで来ました。中村英夫先生は、元ピッチャーだったと知ったのは、その後のことでした。野球では、四年になって社会工学科との対抗試合を行いました。中村先生がピッチャーで、手も足も出なくて教室に戻ってきたら、吉田先生に「僕は昔、中村先生から二塁打を打ったよ。」と意外なお話を伺いびっくりしました。いまだに詳細を聞きそびれています。

スキーには皆で良く行きました。掲示板には「雪上における滑走体の摩擦に関する研究会」などという、尤もらしい募集が貼り出されていたものです。写真は三年の春の木崎湖での測量実習の際の集合写真ですが、一部有志は、同期の佐々木君の紹介で鹿島槍スキー場から直行

しました。真っ黒い顔をしている人を探してください。但し、右端の木村先生はスキーではありません。

卒論は、吉田研で有限要素法関連のテーマに取り組みました。コンピューターが急速に大型化・高速化している時代で、HITAC8000が導入されたばかりでした。習い立てのフォートランでプログラミングし、ゼロ割の発生や、0とゼロの打ち間違いをしながら、何度もコンピューターセンターに通いました。500枚以上のカードを抱えて行って運搬中に落として泣ける思いをしたのは私だけではないと思います。

卒業後に土木学会をはじめ、各種委員会で東工大の先

生方にお世話になり、はじめて先生の偉大さを実感しました。主に鉄道の分野ですが、中央線高架化では三木先生、篠原先生、新宿南口基盤整備では森地先生、黒川先生、運輸政策審議会では中村先生、森地先生、屋井先生、新潟県中越地震での発電所の復旧では大町先生にご指導頂いています。そんなこともあって、このごろ大学で非常勤講師を努める際には、学生の眼からはわからないが、大学の先生は世の中では偉いのだと必ず話しています。我が6期には、大学の先生が客員教授も含めると5名いるのが一番の自慢です。



6期測量合宿（木崎湖）

土木工学科40周年によせて

土木研究所：S48年卒、S50年修

北川 明

大学院を終え、30年以上になるが、4学年時と大学院での経験はいまでも忘れることはできないほど、自分にとって強烈かつ大変貴重な体験であった。この土木での3年が無かったとしたら今の自分ではなかったであろうことは想像に難くない。ただ与えられたものを学ぶことから、自ら問題点を見いだして解決を図れる、いわゆる責任を全うできる力を付けていただいたと思っている。学生であるにも拘わらずだれにも相談せず、実験資材を直接業者に注文させてもらえたが、そのようなことができたのは後にも先にもこの時期の東工大土木だけで

はないであろうか。学生にまで自由な発想で研究に取り組む機会を与えていただいたが、何が重要なのかそこどのようにアプローチしてくのか私には力がなく、結局テーマを与えられご指導をいただいた。

これまで、自分なりに堂々とやってこれたのは、あの東工大土木で過ごしたという誇りと育てていただいた力のおかげである。先生方への感謝を忘れず当時の気持ちを思い起こし、もう一度自分自身を奮い立たせてみたいと思っている。